

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

シナダレスズメガヤ (*Eragrostis curvula* Nees)

細木 大輔 (国土交通省国土技術政策総合研究所)

hosogi-d92ta@nilim.go.jp



シナダレスズメガヤは南アフリカ原産の外来草本で、英名はウィーピングラブグラス (Weeping Love Grass) である。砂防で利用されて世界各地に広まっており⁶⁾、日本には山腹緑化用として1951年に初めて導入された⁴⁾。私が10数年前に日光市足尾町の砂防現場を訪れた時は、本種ばかりが斜面にもうもうと生えていた。その地域にたくさんいるニホンジカやカモシカは食べないらしい。走出枝が生じず、株状になるため、他のイネ科緑化草本と違って芝生としては利用されない。これまで主に法面や自然崩壊斜面の緑化に用いられてきており、優秀な外来緑化草本として評価されてきた⁴⁾。

英名の Weeping には「しな垂れる」という意味があり、Love Grass はスズメガヤ属の草本の総称であるから、和名は英名をそのまま訳したものである。ちなみに、シナダレスズメガヤは“鹿またぎ”であるが、Love Grass は語源の地では牧草として利用されるようなので、Love は「動物が好む」という意味であろう。Weeping にはすすり泣くと言う意味もあるため、俗に「すすり泣く愛の草」と人情をくすぐるように呼ばれることがあるが、それにちなむ逸話があるわけではなく、本来の意味ではないと思われる。

本種は多年生草本で、茎は叢生、直立し、高さは60~120cmである。葉は長さ40~60cmであり、幅は1.5~2.0mmと同程度の草丈のイネ科の中ではかなり細い方である。葉舌はほとんど欠き、茎、葉はともに無毛。葉鞘の口部には長毛が輪生する。茎の頂きに20~35cmのやや紫色を帯びた円錐花序を形成し、熟すと名前のとおりしな垂れる。株状に叢生する生え方、葉の細さ、穂の形と色で遠目からでも同定できる。



写真 - 1 ウィーピングラブグラスで緑化した法面

緑化植物の性質としては、耐暑性と耐旱性が高く、瘠地や砂地でもよく生育する。耐湿性は低い⁷⁾。耐陰性、耐寒性は極めて低く¹⁾、冬期には葉が枯れたまま地面を覆うように残る。残った枯れ葉は、乾燥すると野火の原因になりやすい。春には右上の写真のように枯れ葉の間から新しい芽を伸ばす。関東以西の暖かい地方に適するが、東北地方でも緑化で使用されたりしく、現在では青森県以南に分布している³⁾。

本種は、緑化導入された法面や崩壊跡地だけに生育するに留まらず、河川に逸脱して繁茂していることが報告されている⁵⁾。本種は細根を広く張って叢生するため、緑化植物の能力として重要な土壌の緊縛力がたいへん強い。多摩川の河原に生えていた個体は根がたくさん丸石をつかんでいて、私が渾身の力で引っ張ってもびくともしなかった。そのため、河原に繁茂した場合は、洪水が起きても流されにくい。流されないだけでなく、土砂を堰き止めて堆積させることで、河原本来の立地条件を改変してしまい、河原の生物多様性の低下を招いている。このような弊害が少なからず報告されていることから、環境省、農林水産省、林野庁、国土交通省共同の外来緑化植物の取扱方針(案)²⁾では、使用を控えることが望ましいとしている。

引用文献

- 1) 堀江保夫 (1995) のり面緑化の植物とその性質, 小橋澄治・村井 宏編, のり面緑化の最先端, ソフトサイエンス社, pp.105-119.
- 2) 環境省・農林水産省・林野庁・国土交通省 (2007) 生態系保全のための植生管理方策及び評価指標検討調査報告書, 217pp.
- 3) 河川水辺の国勢調査 (2007)
<http://www3.river.go.jp/index.htm>
- 4) 倉田益二郎 (1979) 緑化工技術, 森北出版, 291pp.
- 5) 村中孝司・鷲谷いづみ (2002) シナダレスズメガヤ, 村上興正・鷲谷いづみ編, 外来種ハンドブック, 地人書館, p.199.
- 6) 長田武正 (1993) 増補日本イネ科植物図譜, 平凡社, pp.488-489.
- 7) 清水矩宏・森田宏彦・廣田伸七 (2001) 日本帰化植物写真図鑑, 全国農村教育協会, p.444.



密集して生育している様子。



花序（紫色を帯びる）



花序は通常、写真のようにしなだれる。



花序



舗装の隙間でも旺盛に生育できる。



鬼怒川中流域の河川敷に繁茂している様子。
冬の写真なので地上部は枯れているが、いかにも砂を留め置きそうに見える。